# まとめと展望

本研究は前研究課題（平成６年度－９年度一般研究「コミュニケーション障害における教育的援助に関する研究－障害状況における関わり手の役割と言語指導－）を引き継ぐ形で４年計画で行われてきた。この報告書にも見られるとおり、一応の成果は数多く得ることができたと考えているが、今後なお明らかにしていかねばならない課題がとてつもなく多く存在することも確かである。むしろ、今もって、この研究課題の入り口に立ったに過ぎないと言えよう。

ここでは、本研究の成果と課題をいくつかの視点から整理し、今後の展望を示しておきたい。また、文末には、本研究に関連して発表した文献や取り組みを示した。

**１．コミュニケーション障害という枠組み**

本研究を含めた当研究室の一連の研究では、通じない、通じにくいという問題を、子どもの側の能力（発音の不明瞭、発話の非流暢性、語彙・文法力等の未熟など）の問題として見るのではなく、話し手と聞き手（例えば子どもと関わり手）の間にある問題、関係の問題として捉えるところからスタートしている。従って、通じにくさを解消していくために子どもと関わり手ないしは周囲との「関係」に焦点を当て、通じにくさすなわち関係障害を生む構造や、その改善に向けての視点を見い出すべく研究を進めてきた。こうした過程で、関係改善に向けての方策がいくつか得られてきたが、この研究の枠組みは、様々なインペアメントとしての障害、病理学的な障害種別を一端棚上げして、「関係」を軸にコミュニケーションを扱っているため、この研究の枠組みで得られた知見と、いわゆる病理学的な知見とをいかに統合・整理していくかが課題であると考えられる。

**２．「関係」について**

本研究の過程の中でも、「関係」をいかに定義し、「関係」をいかに捉えるかが追求されてきた。「関係」は実際に目に見える形では現れにくいものである。また、本研究では上述したコミュニケーション障害の枠組みから「関係」を捉えようとしているが、実際の言語指導の場において異口同音に言われている「関係が大切」というときの意味合いとは異なるものと考えられ、こうしたことからも、本研究における「関係」を整理した形で提供することが重要と考える。

本研究においては、「関係は関わり手と対象の間にあり、対象に対して関わり手の内面に生じたもの」として関係を捉え、関係を表す資料として関わり手の「内面」を取り上げてきた。しかし、対象が事物・事象であればともかく、子ども、人である場合、相手の思いもあるはずで、この研究で扱った定義が必ずしも一般的な理解とはなりにくいと思われる。巻末資料につけた牧野・松村（2001）でも展望しているが、この研究の枠組みの中で「関係」をいかに考え、捉えるかということは今後も追求していかねばならない課題である。そしてその中で、「内面」を扱わざるを得ないとすれば、いかに第三者にもわかるような記述ができるのかも追求し続けなければならない。これはいわば、コミュニケーション障害の領域における「関係」研究のパラダイムの確立を目指すことにほかならない。

**３．能力・言語獲得・言語指導について**

子どもと関わり手の関係が深まる、つきあいやすい関係となったり、通じやすい関係となったりしていくことは、子どもの側の能力、とりわけ言語力を高めることにいかに関与するのか。このことは、言語獲得の問題を子どもと周囲との関係という視点から紐解いていくことにつながり、ひいては、言語指導に関する知見の蓄積にもつながる課題と考える。本研究のサブテーマの一部にある「言語指導」の問題はこの点で今後に持ち越された課題である。

こうした観点からすれば、個の発達の問題を周囲との関係を含めて解き明かそうとする関係論的立場からの発達心理学や、言語の問題を様々な側面に分類してアプローチする言語学や言語心理学の分野とも関連させつつ検討する必要があるだろう。

以上を端的に言えば、「関係」と「個の能力」の関連性を明らかにしていくことが今後の大きな課題の一つということになろう。

**４．つき合いにくさという問題**

以上に述べた大きな課題はあるにしても、その中で本研究では、関わり手の指導日記など、内面を綴った記録を資料として、そこからつき合いにくさを払拭していくためのヒントを事例的に収集した。この報告書に収められている多くの報告を読み解くことで、ことばの教室、養護学校等の実践の場における関わり手と子どもの関係への援助にいくらかでも寄与できると考える。結果的にこの報告書は事例集的な意味合いの濃いものとなったが、機を改めて、こうした「関係への援助」のありようを体系的に報告したいと考える。

また、本報告書の中にも現れているが、子どもにとって関わり手のみならず、周囲の様々な人、物、事象との関係

を深めていくことが重要なことで、この意味において、関わり手との二者関係だけでなく、子どもと周囲の様々な人、物、事象との関係の問題を検討していくことも課題である。さらに、子どもと関わり手の二者関係においても、それをとりまく周囲他者の存在が子どもと関わり手の二者関係に影響を与えていることが考えられ、こうした観点からも、関わり手が感じる子どもとのつき合いにくさ、通じにくさの問題にアプローチすることが必要であろう。

**5．日々の教育活動の生々しさを対象とすること**

本研究で扱った、関わり手の子どもへの思い等を引き出すことに加え、上述したような、子どもと関わり手をとりまく周囲他者との関係にも目を向けることは、ある種、関わり手の痛みをも伴う事象かも知れない。保護者や同僚がどのように関わり手の内面に関与しているのか、それが子どもとの関係にどのように影響するのかといったことを突き詰めることは、教師間や保護者との人間模様にも触れていくことである。

こうしたことも含めて、日々の実践の場における教育活動の生々しさをいかに対象として追求していけるかも、本研究の今後の課題である。と同時に、コミュニケーションを課題とした教育実践の場が持つニーズに、いかに本研究が応えていけるかも常に念頭におきながら取り組む必要があろう。

**本研究に関連して発表した文献・取り組み**


**＜平成１０年度＞**

・牧野泰美・松村勘由・磯崎ミヨ・真壁成子・山部祐子：子どもと教師のコミュニケーション関係の変遷（４）－関係援助に向けた指導記録・ケース会議の視点－．日本特殊教育学会第36回大会発表論文集．44-45．

・青山新吾・牧野泰美：通級指導教室における関係への援助について（２）．日本特殊教育学会第36回大会発表論文集．94-95．

・牧野泰美・松村勘由：子どもと教師のコミュニケーション関係の変遷（３）－関係援助へのアプローチ－．国立特殊教育総合研究所研究紀要，26，13-22．

**＜平成１１年度＞**

・青山新吾・牧野泰美：通級指導教室における関係への援助について（３）－関わり手の内省検討を通して－．日本特殊教育学会第37回大会発表論文集．148．

・牧野泰美：子どもを支える、ことばを支える．群馬言語聴覚教育研究会紀要「言語聴覚障害研究」，29，3-12．

・言語器質障害教育研究室：コミュニケーション障害における子どもへの教育的援助－関係への援助と言語指導－．平成 11 年度国立特殊教育総合研究所研究成果報告会資料．

**＜平成１２年度＞**

・日本特殊教育学会第 38 回大会自主シンポジウム：関係への援助と言語指導（その１）－臨床家が大切にしている「関係」とは－

・牧野泰美・松村勘由：コミュニケーション障害研究における「関係論」をめぐる諸問題－言語障害教育の分野を中心として－．国立特殊教育総合研究所研究紀要，28，67-75．

**＜平成１３年度＞**

・日本特殊教育学会第 39 回大会自主シンポジウム：関係への援助と言語指導（その２）－コミュニケーション障害研究・実践における「関係」の意味を探る－

・青山新吾・牧野泰美・藤岡秀子：吃音のある暮らしへの援助（１）－ことばの教室でできること－．日本特殊教育学会第39回大会発表論文集（CD-ROM版）

・松村勘由・牧野泰美：コミュニケーション障害への教育的援助に関する研究－研究の枠組み・資料収集及び分析方法の検討－．日本特殊教育学会第 39 回大会発表論文集（CD-ROM版）


（牧野泰美）